

日本古典文學大系 62

東海道中膝栗毛

麻生磯次校注

岩波書店刊行

東海道中膝栗毛

日本古典文学大系 62

昭和 33 年 5 月 6 日 第 1 刷 発行 ©
昭和 51 年 5 月 25 日 第 15 刷 発行

定価 2100 円



校注者 麻生磯次
発行所 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
岩波雄二郎
印刷者 長野市中御所 2-30
田中 忠

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩波書店
一ツ橋 2-5-5

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解説	三
凡例	一六
発端	一九
初編 江戸から箱根まで	四七
二編上 箱根から蒲原まで	八一
下 蒲原から岡部まで	一〇
三編上 岡部から日坂まで	一三
下 日坂から荒井まで	一五七
四編上 荒井から赤坂まで	一八一
下 赤坂から桑名まで	二〇六
五編上 桑名から追分まで	二二九
下 追分から山田まで	二五四
五編追加 伊勢参宮	二八五

	六編上	伊勢から伏見を経て京に入る	三一九
	下	京見物	三四五
	七編上	京見物	三七一
	下	京見物	三九五
	八編上	大坂見物	四三三
	中	大坂見物	四四七
	下	大坂見物 住吉詣 大坂出立	四六五
補注			四九六
付図			卷末

解 説

十返舎一九の道中膝栗毛は、享和二年に初編を出してから、文政五年まで二十一年の長年月にわたって出版されたものである。ちょっと見ると如何にも気楽に筆を進めたようであるが、実は相当の苦心が存していた。そこでまずその内容体裁の上から見て、どういう種類の文学の系統をひき、またどういう文学的資料が集められているかについて略述する。

構想上の影響を洒落本にうけている点が少くない。書式は洒落本と同様に、会話を主としてこれを大字に書し、地の文は小書にし、トと受けて二行に割り、人物の行動や服装などを叙述する体裁になっている。洒落本のこの体裁は、芝居の台本などの影響と思われるが、膝栗毛の場合は、直接洒落本の様式を学んだものである。筋の形態を見るに、各場面は有機的に統一されていない。読本や合巻のような筋の計画や発展はなく、一貫した叙述の体裁を取っていない。ただ場所の関係とか主要人物の関係で連絡を保っているだけであって、話そのものはばらばらに並べられているに過ぎない。大部分の洒落本も同様な行き方をしている。描写の態度が写実的であるという点にも共通なものが見られる。洒落本は遊里を舞台とする人物の身振・服装・風俗・言語などを如実に描写した点に特色が見出せるのであるが、その点は膝栗毛も同様であって、各地の遊廓や宿屋の特色とか、方言とか、身分に応ずる言葉・身振・態度などを克明に描いている。

内容について見るに、膝栗毛は読本や合巻などと異なり、現実に材料を求めている。ことに遊女・飯盛・瞽女などの女性を相手に痴態を演ずることが主な興味になっているが、その点でやはり洒落本と共通なものが見られる。ただ洒落本が主として江戸の遊里を舞台にしているのに対して、膝栗毛は専ら地方の遊女や飯盛を取扱っている。もっとも洒落本の中にも「変通軽井茶話」のような作品があつて、これは信州追分の遊女を描いたものであるが、その趣向の一部はそのまま膝栗毛にも踏襲されている。三島の宿、安倍川の遊廓、岡崎の遊廓、古市の遊廓など、膝栗毛には洒落本風な場面が少くない。つまり膝栗毛は洒落本の舞台を地理的に拡大し、地方的な風土物産等をもつて、さらに潤色を加えたものといえるのである。

膝栗毛は弥次郎兵衛北八の二人物を中心にしている。作品の中心に二人物を置き、相互の対話及び行動によって事件の推移を図るという作品は先例を求むるに難くない。例えば能狂言のシテ・アドの如きはそれである。膝栗毛の趣向には狂言が多く取込まれており、なお後編の冒頭には狂言詞の利用があり、姉妹編たる「金草鞋」にも冒頭にこれを用い、なお鼻毛延高・筑羅坊の二人をシテ・アドとして扱っている点などから見ると、作者が狂言の形式内容に相当関心をもっていたことが考えられる。

なおこの場合、適当な粉本として従来考えられているのは「東海道名所記」で、これには楽阿弥陀仏と大阪の手代とが中心になっている。また「竹斎」には竹斎と白眼之介、「新竹斎」には筍斎と睡毗介、「紫の一本」には陶々斎と遺佚の二人物が出ている。これらは同類の書であつて、同一趣向のもとに二人物を中心に物語がすすめられている。弥次北はいわばそれらの人物の末裔に過ぎないのであるが、ただ従来の人物に比べるとその存在が著しく目立っている。竹斎その他の人物は作中であつてあまり活躍していないが、弥次北の行動はかなり劇的であつて、その地位は重要なものに

なっている。そしてこの二人はほとんど対等の地位にある。従来の人物は主と従、或いは話し手と聞き手の関係になっているのであって、一方の人物の存在はことに稀薄である。弥次北にもややこの傾向はあるが、道中における二人の行動はほとんど対等に描かれているのである。

膝栗毛は一種の狂歌咄ともいえる。「竹斎」や「東海道名所記」にもこの傾向は見られるが、その他に狂歌咄の類は少ないのであって、膝栗毛はその系統を追うている。説話構成の具合を考えてみても、笑話式であるといえるのである。膝栗毛は笑話の数々を五十三次或いは六十九次に配列して、弥次北の二人物をもって貫いているのであって、全体的な筋の計画はあまり問題とされていない。落咄はその場限りの写生やうがちを生命とし、「おち」をもっていることを特徴とする。そのおち方は語戯によるか、身振や表現によるか、いろいろであるが、弥次北の演じた失策錯誤もそれぞれ「おち」をもっているのであって、事件の一段落をもって分割すれば、数多くの笑話落咄として独立し得る性質のものである。黄表紙も内容的に見れば、笑話的な性質を有している。「凸凹話」(京伝、寛政一〇)の如き、「東海道五十三駅人間一生五十年」と角書し、東海道の名物に人間の一生の何かとを附会した作もあったくらいで、これなどは恐らく膝栗毛に対して何らかの暗示を与えたものと思われるのである。

膝栗毛には先行作品の影響が少くない。最も関係の深いのは狂言であって、東海道中だけについて見ても、どぶかつちり・狐塚・つんば座頭・犬山伏・瓜盗人・腰いのり・鱸庖丁・磁石・武悪などの趣向が反映している。続編及び続々編になると、狂言との関係は一層濃密になっている。概して興味の深い大がかりな趣向は狂言に多く拠っている。ことに続編ではほとんど狂言の点綴に成る編も二三見出せるほどであるから、実質的には影響は極めて大きいのである。

狂言以外の先行作品の影響も少くない。関係の明らかなものについていえば、芝居万人かつら・譚袋・軽井茶話・世

間学者氣質・御伽名代紙衣・千尋日本織・通者茶話太郎・開卷百笑・鹿の巻筆・尾上松緑百物語・西鶴名残の友・徒然草・東海道七里艇梁・醒睡笑・川童一代噺・風流田舎草紙・旅眼石などの作があげられるであろう。

さて膝栗毛はかような作品をどういう風に利用したかという点、まずその趣向をいちじるしく卑俗なものにしている。この傾向は正編よりも続編に至って甚だしい。それから滑稽がひどく誇張されている。たとえば狂言の持味は単純素樸な可笑味にあるのだが、膝栗毛はこれに学びながら、その筋を複雑にし、笑を賑やかにしようとする苦心しているのである。

狂言「どぶかつちり」と、その翻案、塩井川の川越と掛川の茶店の場(三・下)とを比較すると、その趣向がいちじるしく細かになっているのに気付くのである。原話の登場人物はわずかに三人であるが、膝栗毛では、犬市・さる市・弥次・北八・茶屋女・茶店の亭主・子守など、数人になっており、それも複雑な関係で取扱われている。盲人どもの拳のこと、たくらみがばれて北八が川にはめられること、盲人共の蔭口のこと、盲人共が茶店の亭主に掛合うこと、子守が弥次北の奸計を発くこと、茶碗の酒のにおいが証拠になることなど、いずれも原話には見られない趣向である。またそれぞれの人物をある程度まで活躍させ、茶屋女の呼び声や長持人足の唄までも挿入して、情景を活かしている。単純で大まかな室町時代の滑稽話が、趣向を細かにして近世風なものに書き換えられているのである。話の前後の続き具合も自然であって、無理がなく、木に竹をついだような感じを与えない。古い趣向を新しく書き換えることは黄表紙などの常套手段であったが、膝栗毛にも同様な苦心が見られるのであって、ことにその正編ではその苦心はかなり報いられている。狐と誤認して人を縛る話(四・上)、虎字を描いて犬を避ける話(五・下)、女郎屋で禪を棄てる話(五・追)など、いずれも原話に比べて趣向が繊細になっている。

膝栗毛が作者の気紛れな筆に成るものではなく、用意と苦心の結果できたものであることは、材料の蒐集が多方面に

わたっていることからもうなずけることである。しかも蒐集の材料は、生のままで、ただ羅列されたのではなく、膝栗毛という全体の気分調子の中に統一され摂取されている。古い話を近世の習俗に合わせるように、過去の材料を巧みに換骨奪胎しているのである。

膝栗毛の初編は、京伝が草稿を一九に与えたものであるという説が、「西沢文庫伝奇作書」にある。また俳歌堂卅集（酒井仲）が書いたものを、望まれるままに一九に与えたという説も「上毛偉人伝」に見えている。これらの説は、そのまま鵜呑にするわけにはいかない。ただ京伝は、飛雄亭の「善惡道中独案内」や無々道人の「迷所邪正案内」などの後をうけて、「貧福両道中之記」（寛政五年）のような道中物を書いているのであって、それらの作が膝栗毛の製作に何らかの暗示を与えたことは事実であろう。

一九は膝栗毛の初編を書いて、長い間恩顧をうけていた蔦屋重三郎に示した。ところが蔦重はこれまで一九の作では当ったことがなかったので、黄表紙ならば兎も角、中本の作を出すことを躊躇した。その事を村田屋治郎兵衛が聞き、一九が板下も挿絵も一人で済ますというので、あやぶみながらも板元となって享和二年に初編を出版することになった。それが意外にも好評だったので、享和三年には後編二冊、文化元年には三編二冊、同二年には四編二冊、同三年には五編二冊、同追加、同四年には六編二冊、同五年には七編二冊、同六年には八編三冊が出版され、ここに東海道中膝栗毛は完成した。書肆も四編までは「通油町 村田屋治郎兵衛」となっているが、五編からは「大坂書林 心斎橋唐物町 河内屋太助、東都同 本石町二丁目 西村源六、通油町 鶴屋喜右衛門、同所 村田屋治郎兵衛」と列挙されている。第八編の奥附には「道中膝栗毛初編 来午 再版」という予告があつて、「原板ことの外摺つぶし候故、再板仕候ニ付、作者又々相考、発端一冊あらたに書加へ、全二冊となしさし出シ申候、不相替御求御高覧可被下候」とある。実際

同八年には二編上下宮嶋参詣、同九年には三編上下木曾街道が出た。木曾街道は同十年四編上下、同十一年五編上下、同十二年六編上下、同十三年七編上下と続き、同じく十三年には八編上下従木曾路善光寺道、文政二年九編上下善光寺道中、同三年十編上下上州草津温泉道中、同四年十一編上下中山道中、同五年十二編上中下同じく中山道中が出た。十二編下冊巻尾に「此膝栗毛則十二編にて全く満尾す。抑初編売出してより当年廿一年ぶりにて目出度成就す。短才愚盲の鄙筆事たらぬがちにて趣向も既に尽たれば、いらざる長物の譏^{そしり}をおそれて此編に筆をさしおきぬ」とあるように、享和二年初編を出してから二十一年かかって、ようやく弥次郎兵衛と北八は江戸に帰ることになったのである。思えば長い道中であつた。十二編の序でも「むかしより戯作の書のかばかり編数をかさね出せるは例なく、予が生前の悦び、偶中の祥^{さいはみ}なれば、めでたく筆を採おさめぬ」といつているが、蔦重に断われ、村田屋に頼んでようやく出してもらつた膝栗毛が、かほどまで長続きするとは、作者も全く思いもうけぬことであつた。

一九の伝記については、「続膝栗毛」五編の末に、板元西村永寿堂の名で次のように記載されている。



(改板本、本文 159 頁の挿絵参照)

一九子性は重田、字は貞一、駿陽の産なり。幼名を市九と云。故に市を一に作り雅名とす 若冠の頃より或侯館に仕へて東都にあり。其後摂州大阪に移住して志野流の香道に称あり。十返舎之号黄熟香の十返しを全ひてこゝにいつる 今子細あつてみづから其道を禁ず。寛政六卯年復ふたび東都に來りてはじめて稗史さいし兩三部を著す。あらは耕書堂版

一九は丸の中に貞の字を入れた熊手型の判を用いたが、「続膝栗毛」五編の卷末にその由来を説明して「一九生酉ノ年也、故ニ酉ノ町ノ唐ノ芋熊手ノ形ヲ用ユ」といつている。彼は明和二年酉年駿河の府中に生れた。浅草東陽院の過去帳に「駿河国府中生、元千人同心の子重田市次郎、初代十返舎一九事」とあるという。「名人忌辰録」には「名貞一、通称重田与七、幼名幾五郎」とある。そこで三田村鳶魚氏は「滑稽本名作集」の解題で、幾五郎の「幾」から「一九」という号にしたという方が聞えがよいといっている。「続膝栗毛」五編末に「若冠の頃より或侯館に仕へて東都にあり」とあるのは、「江戸作者部類」や「戯作六家撰」によれば、それは小田切土佐守であつて、その邸で注簿の役をしていたということである。小田切土佐守直年は、天明元年に駿府町奉行になっていた。

天明三年小田切氏が大坂町奉行になったので、一九も同地におもむいたが、間もなく致仕し、義太夫語りの家に寄食したり、材木商の家に入婿して離縁になったりした。その間に志野流の香道を学び、また寛政元年には、若竹笛躬・並木千柳とともに、近松余七の名で「木下蔭狭間合戦」という浄瑠璃を合作した。「忠臣蔵岡目評判」(一九、享)の近松東南の序に「なには江のあしの仮寐に、七とせあまり漂泊して、予が近松の流に遊びし一風土有、今や東のみやこに居を安ふし、その生業となすものは、年毎にものゝ戯れたる限を、草さうしてふものに編出して、其称をおちこちに唱高うなしたる十返舎のうし」とあるのは、その間の消息を伝えたものである。

寛政六年の秋、ふたたび江戸に出て、通油町の地本間屋鳶屋重三郎の食客となった。そして錦絵に用いる奉書紙に明

鑿水を引く仕事をしていたが、薦重にすすめられて「心学時計草」という黄表紙を綴り、挿絵も一九がかいて寛政七年に出版した。これは吉原の遊女と客のやりとりを、当時流行の心学にあてはめた作であるが、六樹園飯盛の趣向によつたものだといふ。この作を手はじめにして次々に新作を発表し、その名もようやく世間に知られて来た。「江戸作者部類」はその間の事情を詳しく述べ、さらに「かくて寛政の季に至りて、長谷川町なる町人某乙が家に入夫となり数年ありしに、又其所を離縁して更に妻を娶り、通油町鶴屋の裏なる地本問屋の会所を預りて、其所に住居ぬ。後の妻に女兒出生したるのみ」といつている。

この記事を信用すれば、膝栗毛初編を出した享和二年の頃は、長谷川町に入婿になっていたことになるであらう。だがそこも数年にして離縁になり、さらに妻を娶つて、通油町に住むことになった。この妻については「増補青本年表」に一書を引いて「一九の妻女は名をお民といふ、作者の画中にまま見えたり、画面には随分婀娜者なり、一笑」とある。文化二年春の「滑稽じょうだんしつこなし」には「女ぼうおたみ」という言葉が見えるので、少くとも文化元年にはお民という妻があつたものと思われる。その頃一九は日の出の勢で、満都の人気を一身に集めていた。膝栗毛は逐年に出版されて洛陽の紙価を高め、作家としての地位はますます強固になつて行つた。材料を蒐集するために旅行をして見聞をひろめ、狂歌師としても自信をもち、書法にもくわしく、画もよくした。馬琴は鈴木牧之に与えた手紙の中で「画は少々は出来候」と一九のことをいつているが、素人としてはかなりすぐれた方で、膝栗毛の挿絵なども大方は自作であつた。多能多才な作家で、黄表紙の作などもおびただし数にのぼっている。

一九の家は二度ほど類焼したようである。「膝栗毛」七編（文化五年刊）述意の中で、京坂の材料を集めるために上京しようとしたが、類焼にあつて思いを果すことができなかったといつている。その後通油町から深川佐賀町に転宅した。そのこ

とは「続膝栗毛」十編卷末に、板元英盛堂の言葉として、「十返舎一九翁是まで年来通油町に住居いたされ候処、此度勝手ニ付深川佐賀町に転宅いたされ候、知己之御方御用御座候はゞ佐賀丁板元方ニ而御尋可被下候」とある。一九の家はその後もう一度類焼した。「江戸作者部類」に「文政己丑の春三月の大火に会所も類焼したれば、長谷川町辺なる新路の裏屋に借宅す」とある。文政己丑は文政十二年に当る。「会所」というのが通油町の会所だとすれば、深川佐賀町から帰って来ていたことになる。

「作者部類」は罹災のことに関連して、「この頃より手足偏枯の症にて遂に起ず、天保二年辛卯の秋七月二十九日歿す、享年六十七歳」と述べている。七月二十九日とあるのは誤で、浅草の東陽院（現在中央区月島通に移転）の墓碑には「心月院一九日光居士 天保二辛卯八月上ノ七日」と刻まれていた。

此世をばどりやおいとまにせん香とともにつひには灰左様なら

という狂歌はその辞世であるという。翌天保三年には、遺族門弟の手によって、向島長命寺境内に記念碑が建てられた。それにはこういう文字が刻まれた。

なべて人のいかに異なりとおもふことも常となりてはめづらしからねど、いつとてもあかぬものは、月の夜と米の飯、さては筆と酒なるべし。

内損と腎虚とわれはねがふ也そが百年を生延しうへ 十返舎一九

妻お民との間にマイという娘があり、藤間姓を名乗って踊の師匠をしていたが、さる大名がそれを見染めて召し抱えようとした。「作者部類」はこの事に関して、「一九いなみて、かれあらでは吾が旦暮をいかゞはせん、縦後よじに幸あるとも、さる事はねがはしからずとて、竟つひにまゐらせざりし也」と報じている。晩年は酒毒のために手足の自由を欠いたら

しく、その生活は必ずしも豊かではなかった。不自由勝ちの中で淋しくこの世を去って行つたのである。

一九は膝栗毛のような作を書いたので、弥次北と同様に滑稽疎陋な人物であつたかのような錯覚をおこさせるが、実は案外真面目な人物であつたといわれている。「膝栗毛輪講」の共古は、明治十六七年頃静岡にいた時分に、柴井有竹という老人から聞いた話を伝えている。有竹が若い頃に知っていたある老人の話によると、一九と知合になつて、一しょに旅をして見たが、始終何か書いていて、ろくろく話をするわけでもないし、あんな面白くない人はなかつたというこゝとである。また「膝栗毛輪講」には、南方径方の「随聞積草」から、「一九には両三度も出会ひしが、膝栗毛など戯作せし人とは見えず、立派なる男ぶりにて、いさゝかも滑稽などつゞる人体とも思はれず」という一節を引いている。實際に一九に会つた人の話や記録によると、男ぶりもよく、戯作などはしそうな真面目な人物であつたらしい。さる大名が妾に召し抱えようとしたのを断つたのも、娘をとられては生活に困るという理由もあつたろうが、一方ではたとい相手が大名でも側室にするには忍びないという潔癖な気持があつたのかも知れない。

文化十年に、墨川亭雪麿は「稗史通」を著し、一九の小伝の中で「或人曰一九子漂泊の内寺の門番にもなりたることあり」と書いた。それが一九の目にふれたので大いに憤慨し、雪麿に会つてその噂の出所を訊じた。雪麿はただ世間の風説を聞いたまでだといつて、話した人の名をあかさなかつた。戯作を業とする者が、そういう噂をたてられては甚だ迷惑するといつて、一九の怒はなかなか解けなかつた。人々の斡旋で仲直りはしたが、その後たびたびこの問題について雪麿を詰責した。「膝栗毛発端」では、「近頃雪麿なるもの稗史通と題して、新古稗史の作者画工の出所事跡を記したるを閲したるに、悉く齟齬して、実に勞して功なき稗史不通の書と謂べし」といふて、鬱憤をもらしている。のんきで瓢逸な滑稽人物だけではなかつたことは、このことから察せられる。

一九にはいろいろな逸話が伝えられている。その遺骸を茶毘に附したところ、棺の中から数条の星光がほとばしった。会葬者を驚かすために、遺言して烟花を仕掛けておいたのだという。また来客を裸にして風呂に入れ、その着物を着用して年始廻りを済ましたともいう。その他さまざまな逸話があるが、それをどの程度信じてよいかわからない。烟花の話は落語家の林屋正蔵の場合と混同したのだというし、年始廻りの話は弥次北の奇行がそのまま作者の行動と思い誤られたものであろう。ユーモア作家には案外真面目な人物が多いが、一九もその例にもれなかったのかも知れない。

しかし直面目であつたといつても、頑固一徹で融通のきかない朴念仁でなかったことは明らかである。「随聞積草」にも「立派なる男ぶり」とあるように、なかなか男前がよかったらしく、たびたび入婿をし、女どもからもてはやされたようである。膝栗毛の二編の中に「去年の春一九が中田屋の勝山にしばらくいられた時」などとあるところを見ると、吉原あたりでかなり放蕩もしたことであらう。人附合のわるい窮屈な男ではなかったと思う。馬琴は鈴木牧之宛の書中で、「一九とは深く交り不申候へども、氣質は悪からぬ仁と見うけ申候。如仰一九は浮世第一の仁にて衆人に嬉しがられ候故、遊歴の先々にても餞別の所得格別なるべし」といい、「十返舎は能を妬むことなく、おのれを飾り不申事は、尤賞すべきに覚申候」といつている。

一九は、人を賞めることの嫌いな馬琴から、かなり好意的に見られている。人の能をねたまず、おのれを飾らぬ人柄が、高く評価されているのである。雪麿との不和は特別の場合であつて、「浮世第一の仁」であるから、好んで事を構えるようなこともなく、人附合もよく、きさくな人柄であつたように想像されるのである。